

カイウサギの安楽死について

先にお知らせした「カイウサギの展示終了について」たくさんのご意見を頂きました。当園としても説明が不充分だったことを反省し、当園での飼育方法、治療経過、検討内容と判断についての詳細を追加報告するとともに、今後の動物公園運営および飼育動物の適切な管理に努めて参ります。

●当園での飼育方法について

カイウサギは、子供動物園内にあるふれあいコーナー飼育室の他に、別棟で複数頭（メスのみ）飼育室、産室の3箇所を使用し、展示個体の頭数や個体間の相性を管理するため、飼育室間を必要に応じて移動させながら管理していました。また、毎日の個体観察、温度管理、床とカイウサギの体を清潔に保つための床材（干し草）の全交換、水洗い、定期的な消毒と駆虫を行っていました。

そして、ふれあいの際にはカイウサギの健康状態を事前に確認し、参加者の方には事前事後の手洗い消毒の徹底をお願いしていました。

●感染症の発生と治療経過について

令和元年

5月初旬

複数頭飼育室の個体群内にくしゃみや鼻汁などの症状。当園の獣医師が診療。複数頭に鼻炎や結膜炎の症状が確認されたため、発症個体ごとに抗生素の注射投与を開始。症状の出ている個体を隔離するため一時的に産室に移動。10日間ほどで症状は治まり治療を終了。

5月中旬

数頭に再び症状を確認。隔離と抗生素投与を長期間継続した結果、症状は鎮静化。治療を終了。その後、約半年間発症個体は見られず。

12月中旬

再び複数頭に症状が見られたため、全頭の健康状態を確認。発症していないくても蔓延している可能性を考え、全頭の抗生素の注射投与開始。

12月下旬

症状は鎮静化。

令和2年

11月中旬

症状を再発する個体が出始め、獣舎の消毒や飼育場所の移動、飼育環境改善等、考えられる対策もこれまでと同様に行なったが、他個体にも症状が拡大。最終的にはカイウサギ全体で感染症が蔓延。行なった対策や治療では根本的な解決には至らず安楽死を含めた対応につい

て検討開始。

12月中旬

獣医師による安楽死実施。

苦痛を伴わないよう麻酔をかけて意識がない状態での薬剤注射による処置。

●検討内容と判断について

子供動物園のカイウサギの複数個体群では何度か鼻炎症状を発症し、その都度治療や環境改善に努めてきましたが、症状は一旦鎮静化するものの発症を繰り返していました。令和2年11月中旬の4回目となる発症の際にはカイウサギ飼育箇所全体に蔓延したため、全頭にとっても一頭一頭にとっても、常に発症リスクにさらされている状況が続くこととなり、感染個体が継続的・潜在的に存在することが感染拡大の要因と判断しました。当園での飼育管理体制においては、過去と同じ治療や対策を行っても発症を繰り返すことから、全体での病気の根絶は難しいとの結論に至り、苦渋の決断ではありましたが全頭の安楽死を決定しました。また、当園としては園内の飼育動物で感染症が蔓延している状況を少しでも早く解消する必要があることも判断理由のひとつです。

安楽死の選択肢の他にも、分散飼育のために1頭1頭隔離してケージ飼育をする方法や、新たな飼い主を探すという案が挙がり、検討しました。

分散飼育するには、他の動物を飼育している施設内でケージ飼育する手段しかなく、感染症にかかった動物を移動することはリスク（カイウサギへの移動ストレスによる症状悪化・移動先の動物への感染・感染個体の分散飼育による人を介した感染の拡大）が大きいと判断しました。その他にも、1頭1頭隔離してケージ飼育をする方法は、衛生面・健康面で充分な環境を整えることが当園では現実的に困難であるため、分散飼育のために1頭1頭隔離してケージ飼育をする方法は選択しないという結論に至りました。

園外に新たな飼い主を探すことについては、感染症にかかった動物を譲渡することによる園外での感染拡大を防止するために行っておりません。今回のケースもその原則に則り当園としては実施できませんでした。

今回の事例では、発症、蔓延させてしまったことが安楽死という判断に至った大きな要因であることを反省し、今後の感染症対策強化に努めて参ります。

●動物の情報発信について

動物公園では現在約70種類350頭羽の動物を飼育していますが、生まれてくる命、亡くなっていく命があります。以前は、明るい話題として生まれてくる命については発信することもありました。一方、亡くなった動物たちの話題はあえてその多くは発信していませんでした。

動物公園再生事業について職員で考える中で、改めて動物に向き合う姿勢や意識を話し合い、明るい話題だけではなく、治療を繰り返している動物もいる現状や亡くなっていく命

があることを皆さまにお知らせする必要があるという考えに至りました。

その中で、これまで行っていた安楽死についても議論を重ね、判断基準を作成し、その都度充分な協議を行ったうえで判断することとしました。そして、このことについても同様にお知らせしています。

動物の死亡も発信することにより、厳しいご意見なども頂きますが、このような姿勢に対して応援をいただくという関係も築けてきているものと考えています。

※今回のカイウサギでの感染症は、昨年ノウサギで発生した兎出血病と関連性はありませんが、改めてノウサギで発生した兎出血病と現在のノウサギの飼育状況についてお知らせいたします。

ノウサギで発生した兎出血病はカイウサギにも感染する病気ですが、カイウサギはノウサギ獣舎から離れた場所で飼育展示しており（直線距離で約500m）、ノウサギの飼育担当がカイウサギ舎に立ち入らないなど感染防止対策をした結果、カイウサギでの兎出血病の発症は見られておりませんでした。

ノウサギでの兎出血病発生や対策についての経過は以下の通りです。

令和2年6月末から7月初旬にかけて、兎出血病が原因でキュウシュウノウサギとトウホクノウサギ合わせて8頭が死亡しています。放飼場で複数頭飼育していた個体から死亡し始め、野生動物の影響も推測されたことから屋外飼育の個体を全て屋内に収容しました。しかし夜間の監視カメラでは野生動物の存在は確認できず、解剖検査やその後の病原体検査により兎出血病と判明したものです。

その後ノウサギ獣舎と放飼場の消毒を行い、ノウサギの屋内展示室間での移動も禁止するなど感染拡大防止対策を徹底した結果、ノウサギでの新たな発症は見られておりませんが、引き続き感染防止対策を行っています。

ノウサギの展示は令和2年10月4日より再開しておりましたが、展示再開したのは屋内展示室のみで、その際も消毒を徹底した上でお客様との距離を十分に保ちながらの展示再開でした。また、土壤消毒のための石灰散布を行った放飼場での展示については、リニューアルへ向けたノウサギ舎・放飼場の改修工事の際に土壤の入れ替えを行った後にノウサギを放飼する計画となっておりましたが、工事開始の延期により放飼場での展示再開には至っておりません。

現在はトウホクノウサギを7頭飼育しています。リニューアル工事後、放飼場での展示も再開する予定です。

盛岡市動物公園 ZOOMO

園長 辻本 恒徳